

---

# 尋ね人の欠片

吟遊詩人 涼一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

尋ね人の欠片

### 【NZコード】

N6438Y

### 【作者名】

吟遊詩人 涼一

### 【あらすじ】

片鱗を集めて繋げば、たくさんの人人がいる。  
独りに見えて、そこにはたくさんの人がいる。

## 女の声の進行

お父さんを探してくる。  
お父さん、どこにいるの？

見つけられない。

明日はお父さんと一緒に近くの海の見える町で行く約束だったのに。

お家には誰もいないし、お母さんはお父さんを探しに行つたままもう何年も経つ。

お母さんがいなくなつて、でもすぐにお父さんは帰つてきた。お母さんがいなくなつたから、お父さんと私の一人だった。

ずっとお母さんに会いたかった。

お父さんは、明日になつたらお母さんに会えるとい、お母さんこないに行こうって、そう言つてこいた。だから私、お父さん見つけるまで、お父さんを探す。

そしたらお母さんも帰るの。

またお母さんとお父さんと暮らすの。

ずっと泣いてばかりいたけれど、泣き虫は嫌いってお父さん、言つていたもの。私泣かないよ、お父さん見つけるの。

お兄ちゃんも一緒に探してくれる？

お兄ちゃんはどうから来たの？ お兄ちゃんも何か、探しているの

? 独りで、寂しくないの？

誰を探しているの？ きっと、大切な人でしょう？ お兄ちゃんは強いから、きっと見つかる。泣き虫はすぐに負けちゃうもん、お兄ちゃんは負けないよ。

でもお父さんもお母さんも泣き虫だから……弱虫だから、すぐ負けちゃつかもしれない。だから私が助けてあげなくっちゃ、お父さんとお母さんと一緒にいられないの。

私、強くなるの。それでお母さんとお父さんを守つてあげる。

お兄ちゃん、私もひたちを探すね。大丈夫、私は迷子になつたりしないよ、だつて聞こえるでしょ？ 近くにお母さんがいるよ、泣き声が聞こえる。

お兄ちゃんはお兄ちゃんの大切な人を探して。私はもう平氣、独りでも寂しくないよ。

少しだつたけど、ありがと。暗くて目が見えにくいけど、お兄ちゃんが手を引いてくれたから、ここまで来れたよ。今は声が聞こえるから目が見えなくてもいいの。それよつお兄ちゃんは、びっくりして独りで歩けたの？

あー、お母さんが行つちやー。

私もう行かなくちゃ。

さようならお兄ちゃん、また会いましょう。

## 彩夏の受信ボックス

「冬菜」

8 / 16

宿題終わつた？

8 / 17

宿題終わつた？

8 / 18

学校やだな

あやかは学校好きだよね

私は嫌い

大嫌い

8 / 18  
もう消えたい

私が私じゃないみたいになるの

8 / 19

今日暑い？

熱中症とか気をつけたね

8 / 20

おめでとう

会えないけど、あやかのこと大好きだよ

8 / 25

助けて

怖い

8 / 29

ありがとう

8 / 30

ごめんなさい

大丈夫、あやかのせいじゃない

私のせいだから

私が悪いの全部

また会えるから

8 / 31

0 : 0  
0  
忘れたの?

## 彩夏との進行

まだ夢が続いているようだった。身体中を小さな何かが這つて廻つて、その爪は小さく痛い。

君の夢に出てきた日は、まるで悪夢のようだが、どうかその日が訪れないようにと願っている。

安らかな夢だった。君は笑っていた。

でも夢は叶わない。

夢は叶わないから夢のまま覚める、そして現実に続く。その夢は叶わない。そして君の笑顔も夢の中、美しい暗闇の中に消えていった。

住んだ世界が違うなら、僕も君とは田も合わはず。いつか君は忘れてく、僕の夢を、僕との夢を。

誰かが倒れている。

細い体は静かに揺れた。

「どうしてこんなところにいるの？ 危ないよ、早く逃げて」

暗いもやが視野を縁取り、辺りの木々を燃やしている。誰かは暗闇の中から這い上がり、そして僕に言った。

「私が見えるの？」

僕には見えた。彼女は見えていない。そこは暗闇、何もなければ、何も見えない。

僕の目とは違つ何かが、この闇の中の姿を映している。輪郭のない形は静かに踊つて、何かが違つ。

「君も逃げなくちゃ」

傷を負う彼女に言った。僕の声じやないみたい、でも声は僕のもの。

「私はこの先に行かなくちゃ」

闇は闇、中に紛れて知ることは、光の中にいたことと、戻る仕様はどこにもないこと。

## 冬菜の思ひ出

あやか、どこでいるの？

なんだ、そんなところに……。

どこへ言っちゃったかと思つた。これ、かくれんぼって言つたね、つまりない。

鬼になつたら独りで探さなくちゃいけない、私嫌だ。私はすぐこ見つけちゃうし、みんな隠れるの下手。

あやかも下手、それじゃあみんなに見つかっちゃうよ。みんな見てるよ、どこかで。

ねえ、もつと楽しいことして遊ぼう。

ずつと一緒にられるの。

いいよ、みんな隠れてるんでしょ、今のうちに逃げよう。

向こうの方に面白いものがあるの。

どうして、いいじゃない。ちょっと痛いだけでしょう？  
指を出して、田を開じて。

そしたらきらきら、楽しげといつに行けるの。たくさんの光が  
つて、怖いものなんて一つもないの。お化けもいないよ。  
でもあやかは見えないから、危ないかもしれないね。

安心して、私がついてるから。私があやかの手を引いてあげる。

暗い場所でも手を繋いでいれば大丈夫。

痛くない？ 痛いよね……私がもつと守つてあげなくちゃ。  
怖くない？ 怖いよね……私がもつと守つてあげなくちゃ。

誰かいるよ、一緒に逃げよう、追つてくる。

帰りたいの？　だめだよ、帰り道にはみんなにたくさん……むせ  
戻れないよ。一緒に行こう？　お母さんもお父さんも、いつも通り  
だよ。

帰るときにはまた同じ場所に帰れるよ。私達はここにいればずっと  
ここまままでいられる。

ねえ、隠れたりしなくていいの、かくれんぼもなくていいんだよ。  
ずっと一緒に。ここにこいつまでも遊んでいよう？

……あやか？

……。

あやか、かくれんぼ楽しいね！　他には誰も隠れていないんだも  
ん。一人だけのかくれんぼ、私大好き。

これ、かくれおについて言うのね、好きだよ。

だってあやか追いかけるの楽しいの。独りじゃない。かくれんぼ  
で独りになるより、一人でおいかげっこするの、すごく楽しいよ。  
でもね、あやか。

言ったでしょう？

そんな隠れ方じゃ、すぐに見つかっちゃうよ。

めのん……めのんなのね。

「いや、おかあさん、うるさいね。よかつたね、やつとあそた  
ね、もうだいじょひぶね。

おかあさん、おひがひちかしつらからぬ、こつしゅうにうわ  
ね。

「おとうさんせこつしゅじやなこの？……こつしゅじやなこの？  
めのん、どうかってこにきたの？」

一人できたのね、こわかったでしゅう。まつへらだつたでしゅう。  
めのんはすいにね、おかあさん、こわくてあるがなかつたよ。

おとうさんもこなこの？　おとうさんもがくの？

でもおかあさん、たべれんがしたから、もつおとうさんこない  
みたいよ。おひおひちかえつちやつたのかな。べ、なこ？　ちが  
うの？　パパがわいえたの？

おとうさんのじやがわいえたの？

いいの、おとうさん上からみとどけるよ。

こつしょにこりつね。

ねづちにかえりつね。

君の娘の名前を何て言ったかな。

……そう、メノンと言ったか。

とてもかわいい女の子で、よく見ると私の小さい頃よく遊んだ姉さんに似ていて、年のわりに大人しかった。

他人の娘をこんなに愛しく感じるのだから、父親である君にしたら大変なものだろうな。

ただよく言つるのは、女の子は小さいうちはいいが、大人になるとだんだん父親から離れていくようになるというやつだ。

メノンちゃんを見ていると、俺の娘の小さいときを思い出す。また会わせてもらえないかと。

そうか、すっかり俺のことは嫌つてしまつたか。

一緒に遊んでくれないのは、俺が嫌いだからなのか。

まさか、羨んでいるわけではないが、君のことは少しばかり羨ましいのかもしれない。

……君が信じてくれなくてもいい。ただ俺のことを聞いてほしいのだが……。

たまに、メノンちゃんは俺の子の生まれ変わりのようなんじゃないかと思うんだが、どうだろうか……。

妙なことを訊いてしまつたようだつた。

人の娘にこんなことを思つるのはおかしいかもしれないが、しかし

……。

あの子にやつづなのだ。

かわいい女の子で、小さくて、まるでずっと時間が止まつたようなんだ。  
メノンちゃんは、たまに不思議なことはないか。変わったことはないか？

メノンだけでも逃がすべきだ。君が信じなくてもいい、ただ何かがメノンを追っているんだ。

これは業務連絡だ。  
俺の命令は絶対だ。

あの穴の崩れる前にお前は坑夫をやめるんだ。

## 井音のねまじない

ふねはとても小さくて、一人しかのれなかつた。おかあさんは川につながれたくさりをほどいた。

くろいかげのたくさんがれる川を、小さなふねなのにすすめるのはなんでかな。

でもふねは小さいからとても大きくなれた。右に左に、わたしたちを水の中にのみこもうとしているみたい、お皿の中のわたしたちをくろいおせかなさんたちがたべようとしているの。

「めのん、むやんとおかあさんにつかまつっていてね」

でもおかあさんもいっしょにおちてしまいそつ。

「おかあさん、こわいよ、おちちゃうよ」

「だいじゅうぶ、そうだ、ねえめのん、あのうたをうたつて。おかあさんのおしえてあげた、あのうたをうたつて」

おかあさんのうでの中でおうたをうたつた。

「二入てをつなげば、むすぶ。三入てをつなげば、一人ほどいてむすぶ。四入てをつなげば、二つむすぶ。五入てをつなげば、一人ほどいて一つむすぶ……ねえ、いつまで？」

それから、大きなでがおかあさんをむすんで、わたしをほどいて、いつちやつた。

## 彩夏の送信ボックス

「冬菜」

8 / 1 - 6

大丈夫、安心してよ  
全然終わっていないから  
( ^o^ ) ^o )

8 / 1 - 7

ふゆなはじつなのよ  
( ^o^ )

8 / 1 - 7

私が好きにしてあげようか  
まあ悩みがあるならいいなよ  
友達でしょ

o ( ^o^ ) o

8 / 1 - 8

ふゆなはふゆなんだよ  
それでいいじゃん

8 / 1 - 9

なにそれ?  
もしかして帰省してるとか

8 / 2 - 0

ありがとー!

( ^o^ )

やつぱりふむなは心のとせー  
会えなこつて、ナゼ（？—？）

8 / 21

ふむなー、宿題終わつた?

8 / 21

白状しなさいよ

8 / 22

私終わつたからね!

8 / 30

さうしてやんなじと並んでの

8 / 31

ふむな、だめ

0 : 05

つかくなつたでしょ

## 冬菜の思い出2

冬菜は何だか不思議だった。

今までずっと近くにいたけれど、いつも何を考えているのかわからなかつた。

他の子は仲良くなつたらすぐに見えてくるのに、その子のときはそれがなかつた。何も見えなかつた。

だから人といふときに、いかにその人の心の模様を知ろうとしているか、私に感じさせてくれた。冬菜にはそんな不思議な力があると、私はそう思うよ。

私はいつもふわふわしていた。いろんな人と関わつて、誰にでもおんなんじように接していた。それが当たり前のことで、人によつて態度を変えるより、その方がいい人間なんだ、私は思つていた。でも、冬菜にあつてからは違つ。

彼女は私にしか言葉をくれなかつた。誰にも口を利かなかつた。私は何だか、それがかつこいいように見えた。

この子は私よりもっと素直だ。 そう思つた。

冬菜は何だか不思議だった。

素直で、私なんかよりもずつと一途で、強かつた。

彼女が私に与えた影響は、どんな偉い人の本を重ねても比べ物にならぬくらい大きい。

人はもっと素直になるべきだと、私はそう教えてもらつた。

でも、どうして?  
あなたは素直なはずなのに。

## 千花の夢

母ちゃん、聞こえる?

何で、あたしの夢なんか言わなきやいけないの?  
ちょっと待って、考えてみるから。……あたしの夢かあ、考えた  
ことなかつたもんな……。

じゃあさ、母ちゃんは何になりたかったの?

……お嫁さんにもらつてもらつ人がないと……もしかして、ずつ  
と一人だつたりしてねえ。

ねえ、母ちゃん、母ちゃんはお針子さん、いや? 嫌じやないの?

そうか、母ちゃんはお裁縫好きだつたのか。

でもあたし、もし一人だつたら自分で稼がねばいけないのよね。  
そしたらちゃんと学校行つて、勉強して、先生とかになりたいわ。

そうよね、早く嫁にいかなば母ちゃん、大変よね。もうつてくれ  
る人、いればいいけどね。

……カゼさん?

……カゼさんは、あの人は優しい人なのよ。男らしいし、ずいぶ  
んいい人よ。

素敵な人なのよ。

でも、あの人は……。



先生が教卓を少し叩いた。

「おい、ちょっと静かにしてくれ」  
ざわざわしたままの教室は、この学年始まって以来変わっていない。  
もうすぐ一年経つのに。

先生は体育教師、怒鳴りそうな顔しておいで、そういうことはあまりなかつたし、中学の先生より怖くない。こういうときには、わりと黙つて気持ちを伝えるタイプの、じわじわ後から怖い感じの先生だった。

携帯電話を右にすらすと、先生がそういうモードに入っているのがわかる。私は素直な子だから、すぐにケータイをしまった。

そうしてしばらくしているうち、無言に気づいた生徒達は、姿勢を正して先生の言葉を仰ぐ。

先生は静まりかえった教室に大きくため息をついで、話し始める。「みんな知つてると思うんだが、この教室にはあまりよくないことが起こつていてる」

あまりよくないことといえば、最近私の頭の上の蛍光灯が限界きてるつてこと。目に悪い。

「これはみんなを責めているわけではないが、確かにクラスみんなの問題だと思う」  
もしかして、いじめとかあつたのかな。

……私つてやつぱり、冬菜みたいに素直じゃないよね。

「池崎冬菜は最近、学校をよく休むな……いわゆる不登校といつやつだ」

先生は意外にも淡々と、そういうことを言つ。かつこいい。

黙つていたみんなが、さらに静かになる。息も止めてる？

「これはあいつが一人悩んでいることなのか、それともお前達は何か知つてているのか、池崎に話を聞く前にお前達に確認をとりたいん

だが、この時間はそういうことに使ってもいいか？」

何で先生は私達にそんなことを訊くんだろう。

でも誰だって、何も知らないって言うよね。どれだけの人がどれ

だけのことを知っているのかわからないけど、少なくとも、この教室には嘘つきが一人以上いるさ。

まず一人目、私。

# 黒い草原

どうしたの、なってるの？

# おかあさんがいないの？

まあ、おじょうちゃん、人の子ね。じゅうでいいができたの？

まあ、あの川はふねでわたつちやいかないつて、さんざいいつたの  
だ。  
。

かわこねり、おかあさんこないんじや、おうちでかえれないね  
え。

か、おばあちゃんといつしょに、ね？

あれ、どうしたの？

がくれんはてきしにかのかい

かりはえていて、かくれんぼなんてできやしないよ。  
あれ、~~きのと~~いつかひだをまるめてるのかな?

「えーとかな、わね、でてせん、おまえがやさとこひしめ」「こいへな。」  
「せあのがつべりなやつがぬつてくねからね、せねへりやうりな。

かくれぬといひかなこよ。  
せやくねし、ゆうあぐだよ。

じゃあ、こいつかな？

あ。

ほら、みつけた。

## 黒い氾濫

筆で無理やり描いたような一筋の暗い川が、龍の「ひ」を「ほじ」ながら流れしていく。辺りが暗いせいか、川の色もあまりよく見えない。

「あきらくん、はやく逃げないと……来るよ」「痛みがあるはずの彼女は、さほど取り乱す様子もなく、不自然なほど落ち着いている。

「でもこの川、どうしよう……あれと同じ色をしてるから、あまり近づくと飲まれるよ」

「どうしてそんなことを知ってる?」

彼女はただ者ではない。僕はそんなふうに思った。

辺りを見渡す。その目も何かが違う。普通の女の子の目じゃないように思える。何かを知っているよう。

第一、僕以外にもこの場所を知っているやつがいたとは、そここままず驚きを隠せない。

ただ、今はそれどころではない。

「見える、あきらくん」

彼女は下流を指差す。濁流の穂先に大きな橋がある。弧を描く様子はこの川の流れにも負けない存在感を放っている。

「あの橋だろ?」「う

「そう、あそこから逃げられる」

向こう岸に逃げたからといって、やつらが追うこと止めるわけでは無さそうだが。

森が燃えている。

「はやく、行こう。渡し守もそろそろ気がつく」川の中から黒い姿が這い上がり、三角の帽子をあらわにする。繋がれている舟の横で手招きしている。曲がった腰に杖、陰の中に光る猫の目。

「田をつけられたら、どこまでもついてくる。田を合わせずに行  
こう」「あやかは僕の手を引くと、走り出した。

## 架け橋

千花、聞こえる？

今ね、黒い川に橋を架けているよ。お前も見に来なさいよ。男達が水に浸かって一生懸命になつて石やなんかを積み上げているよ。

みんなあの子が悪いから、母ちゃんすごく辛いけど……したことは罰を受けるのが当たり前だよね。もつすぐ新しい命が連れてこられて、お前もちゃんとした人になれるね。

華是の坊やにもちゃんとお別れ言っておきなさいよ。

あなたが上に戻つたら、もう一度といつしかに来られなくなるんだからね。

今日も華是の坊やが薬を届けに来てくれたよ。本当に、だんだんいい男になつてきて。

それに私は罪人の親だつてのに、なんだつてあんなに優しくしてくれるんだろうね。

でもね、かわいそなことに、華是のところの下の娘さんが、橋渡しにされるそうだよ。

え、華是はなんて言つてたかって？

平気な顔して笑つていたけどさ、本当は悲しいでしょう。だってずつと一緒にいた妹が、一生離ればなれになるつていうんだからね。

千花かい？ 千花なのかい？  
どうしたんだい、こんな夜中に？  
千花？ なんだい、聞こえないよ。  
千花？ 千花！  
あんた、華是の坊やを呼んで、千花が……！

ねえ、教室の飾りつけ、聞いた？ 机は全部出すって。それで後ろと前の壁には段ボールに絵を描いて貼って、長机二つとか並べて、それを四つくらい作って……。そうそう、黒板隠しちゃうって。

教室の外はどうするんだろうね、委員の人はあんまり言つてなかつたけど、多分なんか飾るよね。

そーゆーの聞くとなんか私らだけめっちゃ働いてる気がしない？ 委員の人は命令だけしていつも部活行っちゃうしさ。

……あ、みんな来る。

あ、そりだあっくん、私ごみ捨ててくれるね、ゴミ箱一杯だから。

ただいま……って、あれ？ みんなは？ さっきの声って装飾係の女子じゃないの？

なんだ、違ったんだ……。

あ、見て、夕田きれいだよ！

……どしたの？

え、私？

私は別に大丈夫だけど、あっくんこそ。毎日準備に来てるっていうし、遅くまでいて大丈夫なの？

てか、なんでそんなこと聞くの？ まだそんなに遅くないじゃん？ 五時半だよ。

まだみんな部活とかやつてる時間だし、そんなに……

!!

あー……びっくりした。

何今、悲鳴？ 誰かふざけてるだけじゃよ。  
どしたのあっくん、顔青くして……。

あっくん？

一人ほどかれた？ ちょっと、変なことこうのやめてよ、私そ  
ういつの苦手なんだから……。

あっくん？ ……ちよつ、あっくん？ ビーべーの？  
待つてよあっくん！

の橋渡る者 告ぐ

此 橋の結びけ は忌 れる者らの復讐 証なれば、あしたの命通  
る ど、けふの命通 ず。

またさべきなれば、渡し守、あたの命黒き へ落と む。  
けふの命とほすはその命あけぼのより出 、あしたへむかふ きな  
り。

けふにある き命に道示さんとて、あしたにあ る命にあはむ。  
けふとあ たに生ま るは真意なり。  
人なるあしたの命は人にあらず、影なるけふ 命は影にあらず。  
影の望まんとするは、人に るなり。めでたきはけふの日があした  
へ見事にむかふなり。

## あしたの命

「ふゆな……ビリビリの？」

木がたくさんはえていて、遠くが真っ暗に曇っている。  
その暗がりの中に消えていったふゆなの姿は見えない。

「ここよ、彩夏……」

笑い声が聞こえた。

だけど違う、これは。

「ふゆなの声じゃないよ、ふゆな、帰ってきてー。」

風が肌を切りつけるのを感じる。ビリしてだろう、真っ暗で何も見えない、それなのに全てが見える。何かが懐かしい。まるで前から知っている場所みたい。

「ちがうでしょ、彩夏……おもいだして、かえつてくれるのは、あなたでしょ……」

ふゆなじゃない。

「何いつてるの……もうやめて、ここから出して？」

私は黒い空に叫んだ。そして倒れた。誰かに押されたような感じがした。

「うそつき、うそつき、うそつき」

「見せてみなほら、それが一枚田の下で、一枚田は？　一枚田はどじよ、どじよとかくしてんのよー。」

「いつ……た……」

誰かいる。

「ふゆな……？」

ふゆなの影が見える。

私は彩夏だよ、本物の。

「ああ、」口ちくきて、また昔みたいに遊ぼう。

「昔、昔？」違う、私は……」

走り出した。

この暗がりから早く逃げないと、危ない。そう思った。この間にか傷だらけだった。それでも構わずに逃げた。体のそじらじゅうに黒い何かが絡んでくる。

「痛い？ 痛いよね……私が守つてあげる」

「やめてー。」

ベッドから体が飛ぶように感じたのは、初めてだった。テレビとかでよく見る、夢オチだった。

「……でも、やつらの……誰？」

夢の最後にはあまりになつきっと、男の子の姿があった。またそれも、懐かしいイメージがある。

『めーるだよつ』

夜中の零時ひとつと過ぎたことだった。



ああ、お前、そんなところで待っていたのかい？ 全く、また黒に飲まれたりしたらどうするんだい、華是の坊やはもう上に行ってしまったのだからね。

それよりそうそう、お前にいいものを連れてきたよ。かわいい女の子……本当に、お前にそつくりなんだよ……。

なんだい、嬉しくないのかい？ セつかくお前も人になれるというのに。

お前がちゃんと人になつたら、戻ってきた華是の坊やはどんなに嬉しく思うだろ？ 母さんも嬉しいよ。

ほら、ここの……おや、おかしいね。

母さん、そこにあの子がいたと思つたんだけビ。

どじいつたかな、ずいぶんと隠れん坊が好きな子供らしくてね。どじに逃げても無駄なのに。千花が人になるためだつたら、母さん何でもするからね。

どじしたんだい、顔色が悪いよ？

千花、まさかあんた……妙な気になつたんじゃないだろうね？

まつて！

よかつた、よかつた……あなたがほしをわたつていたら、母ちやんにつけまつてたところだつたよ……。

ねえ、あなた母さんと来たんだしょ？ 母さん……三に？  
じゃあ母ちやん、母ちやんがほしどまつてこるのをしつて……。

どひこむわ……。

……………そつだ、これ……………それをもつてげで。

やべ、せんごのはつ……それはあたしの母ちやんがだいじにしこぬものなの。それをもつてにげて、それから……それから、もつとねくの方にこづたら、どひかでまつてこじね。

母ちやんはきっとそのまのこくといをすうとつけしていくと黙うわ、母ちやんがこりに来るまへに、早くにげゆのよ。

あんたが母ちやんに見つかるまへには、わつとおこつくな。氣をつけとくんだよ、三の方はもうとじつしまつてこるから、すうとおくの方ににげなさいな、わかつたりわぬ、こい子だから、早くにげゆのよ。

……………早べ。

……あとが、あたしのまじめでいいかしておねがい、ゆりちゃんの  
皿をぬすめるかな。

カゼさん、早く帰つてきて……。

懐かしい。

とても懐かしい。

暗い光が空から降り注いでいるのは、ユリでしか見る事ができない。  
ない。

美しい私の世界。私の世界に帰ってきたの、私は……嘘の世界にはもうきつと戻らない。

だつてお兄様の願いは、私の手ではなくて、芽音自信にせえられようとしているんだもの。

私は少し心を落ち着かせた。

ここでなら、本当の私でいられる。

冬菜という殻がなくとも、ここで生きていく。

……生きていけたのに……。

「嫌だよ……嫌だよお母さん……」

小さく泣く声が聞こえる。

見れば、小さな女の子が林の道を歩いている。

あの子が……芽音。

あまりに小さい。

あんなに小さい子をここに連れてくるとは、一体どんな人なのだと  
わかった。

でも、私も、冬菜の中にたまに出でていっては、彩夏を連れてきた  
りした。

でも、ここでの私の田には、芽音しか映っていない。

彼女は私に気づいたか気づかないか、走り出した。彼女のすぐ背中には、黒い影がいて、光を吸いだそうとしている。  
かわいそうに、どこまで逃げても、最後はみんな同じになるのに……。

そして、足元に何かを見つける。

金色に光る針。随分鋸びて見える。……ああ、そうか、私の目は冬菜の物だから……。

芽音の落とし物だろうか。

## 冬菜の受信ボックス

「龍大くん」

8 / 18

池崎さんて面白いね

8 / 18

嘘じゃない

お兄さんの話しどか、何だか本当みたいで、俺は好きだ

8 / 18

え？

してたよ、昨日

もちろんフィクションだろ

8 / 18

信じるかよ

しかし俺は何だかホントのような気がしてゐる

8 / 18

二重人格とか？

8 / 18

ちょっと怖い

8 / 19  
今度どこか行きませんか

精神科とか笑

8 / 19

今日校庭で倒れてる奴いた  
熱中症だて  
最近多いば

8 / 25

仕方ないけど  
どして??  
俺悲しいT  
| T

0 : 0  
すぐいく

## きの「の命

妹はしばらく、俺の方を見ていたが、頭を下げるといとなしく光の中に溶けていった。

叫びが聞こえた。うぶ声が聞こえた。

罪人達は、何も言わなかつた。一人の罪人はただ、渦巻く光の入り口を見下ろしている。

「あなたの妹は……どうして自ら橋渡しになつたのですか」  
罪を背負う女は言った。

「私達のような罪人と同じ様な結末を、彼女は望んでいたのでしょうか」

罪人の分際で、よくそのようなことを言えたもんだ。  
その女の顔は、千花にもよく似ているように見える。俺の目に映るものをも、あいつは変えてしまうというのだろうか……。

あいつには、それだけの力があるのだろうか。

女は、頭を下げる。

「どうか、華是様、私どもに多くの罰をお与えくださいませ……私は千花とは違つのです。それを知らずに、私は大罪を犯しました……」

何を思つたか、女は己の罪を語り始めたのだ。

その泣き顔までが、千花に似ている。

悔しい。

「お前はそうして、罪を軽くしようとしているのか……」  
同情を悟られないよう、俺はそのような言葉を吐いた。

千花の姉は何も言わずに、首を横にふった。

「私はただ……申し訳ないよう……」

嘘に決まっていた。

悪いのは俺だ。

この女の夢術にだまされた、俺が全ての始まりだ。

「恨んでいるなら、恨め。俺は……お前に恨まれて然るべき人間だ」  
光の渦が足元から火の粉をあげる。

「僕は、あなたを恨みません。どうせ、色情に負けた身ですからね、  
あなたを恨むまでもない……この女のよう、あなたに近い存在で  
もない……だから僕は、先に行きます。恨むならば、千花様の美し  
さを恨みますよ」

それは男の声だった。

突然にしゃべると、男は腐った足袋たびのまま、光の中に混ざり込  
んだ。

うぶ声が聞こえた。また一人、新しい罰が与えられた。

「私には、強い罰をお『えください』。その代わり、あなたがそれを

悔やまないよう、私は懸命に……あなたを恨みます  
女の口はしっかりと、こちらを見据えていた。

恐ろしさをえ感じていた。

千花に似すぎている。

「それでは、さよなら、私の愛しい人、……」

彼女は笑った。

千花は光の渦の中に、滑り落ちていく。

瞬間、糸で結ばれているように、俺の体は千花に引き込まれた。

「千花……千花！」

気付けば、光の中に紛れしていく彼女を追いかけていた。

わかつていた。彼女は千花ではない。しかし、足は勝手に動いた。

「華是さん、ここよ、聞こえる」千花の声だ。

「どこのだ、どこにいるんだ」

俺は叫んだ。

「ここよ、闇の中に……助けて、暗くて……寒いの  
闇の中から聞こえる、その声が千花だ。

闇の奥に、千花の笑顔が見える。

「『めんな、千花、今すぐそこに行くな……』  
もうすぐ、手が届きそうだ。」

闇の中に体が飲まれていくのを感じた。暖かい、千花の闇の中だつた。

彼女の姿はない。

ただ、温もりだけが、満たしていく。

「千花……千花じゃない……」

体が叫びと共に、下に引きずりこまれる。

無になっていく。

耳の中に声が届く。

「懸命に恨みます、あなたが悔いることのないことが……」

## 実輪と千花

村はさびれていた。

いつの間に、こんなふうになつたのだらう。

いつの間にといつても、私はついに冬菜でしかなくなつてしまつた。

本当の私であつても、私はずっと冬菜でいなければいけない。だから、それだけ、私が冬菜に近くなつてしまつたということなんだろう。

「誰？」

声が聞こえた。聞いただけでわかる。お義姉さま（おねえさま）でしょ。

「ここにちは、お義姉さま……お久しぶりですね」

私は言って、礼をして見せた。

お義姉様は私を見て、何も言わない。

「お義姉さま、私がわかりますか……」

「……うん、わかる。実輪ちゃんでしょ」

お義姉さまはさすがに夢術師、私の考えることがわかつてゐるみたいだつた。

私は、お義姉さまが大嫌い。

「ねえ……実輪ちゃん、あの子……私の対、あんたが連れてきたの？」

「いいえ、違うわ。

「違います、私は……お兄様の喜ばれることなら、何でもするつもりだつたけれど……もうお兄様はいないもの」

お義姉さまの瞳が揺れた。

きれいな瞳。

誰でもその幻で、誘いこんだ……。

私はあなたが大嫌い。

全て嘘でできているのだから。

「華是さん……華是さんが……」

涙も、嘘だ。

お義姉さんは崩れ落ちると、両をあげて泣いた。

泣けばいい。

嘘をつき続けたあなたの末路よ。

でも……お兄様は泣くあなたの顔を、見たくはない。

私にはわかる。

「お兄様は、かにこつ邂逅していたわ……もしかしたら、あの人人が自分を悔いて、自らそうしたのかもね……」

「華是さんに……会ったの？」

「ええ……でも、すっかりお兄様とは違つてしまつていた。でも、

あの中にお兄様はいるのよ……」

お義姉さんはすぐに、泣くのをやめた。

本当は私もわかつっていた。

あなたがどうして、お兄様に深く愛されたのか。

お兄様は、あなたの幻を愛したのではない。

幻でつくりうごとを知らない、あなたの純粹な心に、惹かれたのよ。

お兄様は、幻にだまされるような、そんな人じやないもの。

「私、闇に飲まれてもいいと思つてた」

あなたは言った。その声は強い。

「私は、それで全てが終わるなら、闇に飲まれればいいと、ずっと思つてた……でも、違う」

小さく、あなたはうなずいた。

「華是さんは、私のために愛するあなたを、地上に向かわせたんだから」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6438y/>

---

尋ね人の欠片

2011年12月27日19時48分発行